

献身の証し

牧師 片平 貴宣

主の御名を賛美いたします。新しい年度が始まり、私が清水ヶ丘教会に遣わされて二年がたちました。新しい出発の時であり、今一度主の恵みを確かめるべく、私の献身に纏わるお証しをしたいと思います。

思い起こせば、私が初めて「献身」という言葉を聞いたのは、おそらく高校二年生の頃だったと思います。私の母教会である福島新町教会でも、礼拝後に時々愛餐会をしていましたが、ある時私の分の食事代を教会のご婦人が払ってくださいました。

その方が言うには、「わたしが食事代払った若者は、みな献身すんだ！」（※福島弁です。私が食事代を払った若者は、みんな献身する）との事でした。当時の私には「献身」という言葉の意味すら分かりませんでした。今となってはそのご婦人に預言者の姿を見る思いがします。事実、福島新町教会からは私を含めて多くの献身者が起こされ、秋田、宇都宮、名古屋等々の教会に遣わされています。

しかし、その言葉を聞いた後、私がすぐに献身の思いを持ったかというところではありません。むしろそんな思いは全く抱かずに、ごく普通の高校生として日常生活、教会生活を送っていました。

そんな私に転機が訪れたのは、自分の進路を決め

るときです。教会に行き始めるようになったのも、高校進学時にキリスト教主義の聖光学院に入学をしたことが大きなきっかけでした。

そして時がたち、高校生活も二年の終わりともなれば、進学をするか就職をするかを決めなくてはなりません。私は高校で山岳部に入っていました。その関係のOBが自衛隊に入っており、入隊のアピールをしに来たことがありました。特に目指すものもなかった私は自衛隊に入隊するつもりで事を進め、同じく山岳部に入っていた友人と一緒に試験を受けに行きましたが、結果は不合格でした。

そのことを私は、家族に報告するよりも先に母教会の牧師である瀧山先生に報告に行きました。なぜそうしたのか自分で振り返っても不思議なのですが、瀧山先生からはその場で東京聖書学校への入学、すなわち献身を勧められました。それまで全く考えたこともありませんでしたが、先生の熱心な勧めもあって、志してみることになりました。

しかし、進路を変更するには時期的に遅かったため、進路指導の先生には手間をかけさせることになつてしまい、いわゆる「お説教」をされたりもしました。最初は当然家族からも反対されましたが、瀧山先生が私の家へ来て家族を説得することで、なんとか認めてもらいました。

そんな唐突に降つてわいたような出来事を通して与えられた御言葉が「神を愛する者たち、つまり、御計画に従つて召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」（ローマ八：二八）でした。

この御言葉は、それまでの私の歩みにも大きな意

味を与えてくれました。自分が行きたいと思つて行った訳ではないキリスト教主義の高校を通して教会へと導かれ、あえて受けたと思つた訳ではなくとも受洗の恵みに与つたことは、神様のご計画のうちになされた事なのだと思われました。自分が進みたいと思つた道に進むことはできず、かえつて行くと思つたことすらなかった道に進むことになりました。神様はそこに最善のご計画を用意してくださいました。と今では信じさせられています。

神学生としての歩みは私にとって未知の歩みであり、牧師として遣わされることなどもまるで手探りの状態であつたことを、今振り返ると思わざるを得ません。初めて遣わされた教会で起こつた出来事を通して、主の最善のご計画がなされた体験を一つ紹介したいと思います。

私は最初、石川県にある恵泉教会に遣わされました。二〇〇二年のことです。その年の冬に私は初めての葬儀を経験しました。しかも召されたのは恵泉教会の創立者である初代の先生でした。正直、そのような葬儀を執り行うのは、自分には荷が重すぎると感じました。けれども石川地区において大きな働きをした先生であり、教団教派問わず係わっていた働きも多くありましたので、地域の教会の先生方が皆協力をし、葬儀を営んでくださいました。

葬儀の後、ある先生が私にこんな風に言ってくださいました。「きっと初代の先生がその命で葬儀の仕方を片平先生に教えてくれたんでしょね。」そのような出来事を通して私は、主のご計画の一端を見せられた気がいたします。主の最善の導きを信じ、これからも従っていきましょ。